

# 毎日笑ってもらいたい —長谷川町子とサザエさん—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

戦況が悪化して東京から故郷の福岡市へ疎開した。母、姉、妹と14歳で上京し、10年の月日が流れていた。日本初の女性漫画家として15歳でデビューし、天才少女と呼ばれたこともある。

長谷川町子(1920—1992)は思いがけない帰郷後、地元の西日本新聞社で記事の挿絵などを描いていた。気丈で福岡大空襲の際も休まず出社する。あちこちに黒焦げの遺体が放置されていた。

終戦後、新たに創刊されたフクニチ新聞から連載漫画を依頼された。自宅近くの海岸を妹と散歩しているとき登場人物を海にちなんだ名前にすることを思いつく。愛読していた志賀直哉の時代小説『赤西<sup>かきた</sup>蠟太』に登場する御殿女中の小江<sup>さざえ</sup>に触発され、主人公をサザエと名づけることにした。

## 悪ガキから人見知りの娘に

町子は現在の佐賀県多久市で3人姉妹の次女として生まれた。実際は夭折した2番目の姉がおり、戸籍上は4人姉妹の3女になる。三菱炭坑の技師をしていた父の勇吉が独立してワイヤーロープの事業を興し、都会の福岡県福岡市に移り住む。

春吉尋常小学校では成績がよく男子と交代で学級委員長を務めていた。しかし優等生ではなく「かなり悪ガキだった」と回想している。図画と作文が得意で授業中によく先生の似顔絵を描いて廊下に立たされた。掃除の時間もさぼって男子とチャンバラごっこをする。正義漢で女子が男子に泣かされたときは男子を屋上に呼んで仕返しした。

卒業後、名門の旧制福岡県立福岡高等女学校(福岡県立福岡中央高校)に進学する。在学中、「ハンサムで素敵な紳士」と慕っていた父が病死し、



長谷川町子

一念発起した母の貞子は娘たちと上京する。

私立山脇高等女学校3年に編入した町子は博多弁や腕白な性格で孤立し、友だちができなかった。徐々に内向的になり、人づきあいが苦手になっていく娘の姿に貞子は心を痛めていた。

漫画を描くことに没頭するようになった町子は人気漫画『のらくろ』で一世を風靡した田河水泡に弟子入りする。町子の願いを叶えるために貞子と姉の毬子が必死で頼み込んだ。町子は内弟子として田川家に住み込み、家事の手伝いをしながら懸命に腕を磨く。子供のない田河夫妻にわが子のように可愛がられたものの、家族と離れた淋しさに耐えきれず1年足らずで実家に戻った。

田河の引き立てによって『少女倶楽部』1935年10月号に掲載された見開き2ページの『狸の面』で悲願のプロデビューを果たす。天才少女と華々しく紹介されたグラビアも同時に掲載され、無名で早熟で人見知りの少女は一躍脚光を浴びる。

初の連載作品『ヒィフゥみよチャン』で漫画家としての地位を確立し、1940年から『仲よし手帖』の連載を開始して話題を呼ぶ。だが順風満帆の日々は長くつづかなかった。太平洋戦争の勃発によって連載は中断を余儀なくされる。

## 小市民の家庭と時代を描く

戦争が泥沼化した1944年、24歳の町子は母、姉、妹と共にふたたび福岡に戻った。西日本新聞絵画部の校閲係として昼頃に出勤、4時に退社という特別待遇で残りの時間は畑仕事をしていた。博多湾の見える丘の上で記事に添えるスケッチをしていたとき憲兵に逮捕されたことがある。町子が眺めていた方向に空軍の基地があり、スパイと疑われた。関係者の奔走でまもなく釈放される。敗戦を迎える1945年、買い出し中に米軍艦載機の機銃掃射から逃れ、6月の福岡大空襲では焼夷弾で長谷川家が炎上して消防員が駆けつけた。

終戦の翌年、新興のフクニチ新聞社から漫画の連載を打診された。すぐに引き受けて構想を練る。近所の<sup>ももち</sup>百道海岸で妹の洋子と散歩をしているとき海にちなんだ磯野家の登場人物が次々に浮かんできた。父は波平、母は舟、長女は主人公のサザエ、夫のフグ田マスオ、弟のカツオ、妹のワカメと砂に書いていく。「小市民のつましやかな家庭の、そしてその時代の生活を描いていきたい」と町子は1946年4月から夕刊フクニチで『サザエさん』の連載を開始する。陽気で明るく平凡なサラリーマン家庭の笑いにあふれた物語は戦後の復興期を生きる人々の共感を呼び、熱烈に支持された。

勢いに乗って同年12月に一家4人で上京し、貞子の発案で『サザエさん』の単行本を出版することにした。新たに姉妹社という出版会社を立ち上げ、翌年1月1日に第1巻を2万部発行する。当初は返品のに悲鳴を上げていたものの、借金をして第2巻を発行し、1カ月に17万部も売れるベストセラーになった。第1巻の返品も引き取られ、姉妹社の単行本は最終的に全68巻に達した。

『サザエさん』の連載は朝日新聞が1949年に創刊した夕刊朝日新聞に移され、1951年から朝刊を飾るようになる。新聞4コマ漫画の第一人者となった町子はアシスタントなしで原稿を執筆し、

夕方4時にやってくる朝日新聞のバイク便に渡すという生活に明け暮れた。アイデアに苦しみ、1960年に漫画家廃業を宣言して約1年休載する。しかし読者に「毎日、笑ってもらいたい」という一心で再開し、1974年まで連載に打ち込んだ。

## 世の中を善くする原動力

もうひとつの代表作の『いじわるばあさん』は1966年から連載を開始した。ブラックユーモアに作風を転換して世間を驚かせた町子は「家庭漫画って清く、正しく、つつましくを要求されるでしょう。だけど、それって私の本性じゃないのよね。『いじわるばあさん』のほうが気楽に描けるのよ。私の地のままでいいんだもの」と語っている。1969年、フジテレビがアニメ版『サザエさん』の放映を開始し、国民的人気の最長寿アニメ番組としてギネスブックに認定された。町子の創作活動は1987年に朝日新聞に発表したエッセイ+漫画『サザエさん旅あるき』が最後の作品となった。

5年後、町子は心不全で他界する。72年だった。生涯独身で「夫や子供の世話で一生を送るなんて我慢できない。私がお嫁さんをほしいくらい」と話していた。遺言によって葬儀は肉親のみの密葬で済ませ、告別式もなく、訃報は1カ月後に朝日新聞社とフジテレビから公表された。

生前、世田谷区桜新町に姉と収集した美術品を展示する長谷川美術館を開設し、近くの商店街にサザエさん通りが誕生した。町子の死後、長谷川美術館の名称は長谷川町子美術館に変更される。

架空の人物であるサザエさんがなぜこれほど人々に愛されたのか。町子はその理由として「常に温かく誠実な一人の女性があるとしたら、社会的にどんなに見映えのしない存在であろうとも、その人こそ世の中を善くする大きな原動力であると思います」とサザエさんの人柄に言及している。

孤高の漫画家と呼ばれた町子は仕事柄ほとんど自宅で過ごし、新聞社や出版社との打ちあわせは姉の毬子に任せていた。出版業界のパーティにも姿を見せず、すでに伝説上の人物となっていた。亡くなる前年に日本漫画家協会賞の受賞式に出席したとき「あれが長谷川町子だ」「はじめて見た」と会場からどよめきが起こった。